

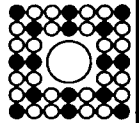
Newsletter of the British Council Japan Association



BCJA Newsletter

No.9

March 31, 1998



天文学での日英協力

家 正則

1982年夏からBritish Councilのお世話で、ケンブリッジ大学天文学研究所に一年間滞在したのが、筆者のイギリス事始めであった。当時は理論的研究を行うために訪英したが、その後研究内容が観測的研究から望遠鏡建設にと拡がって行く中で、英国とのつながりの重要性が一層増してきた。筆者が参加している地上天文学における日英協力は80年代末から始まった。東京大学東京天文台(1988年より国立天文台)がハワイ島に口径8mの大型光学赤外線望遠鏡の建設の計画を練っていた1987年、英国からPPARC会長をはじめとする代表団が訪れて8m級望遠鏡の建設を日英共同で行えないかと打診してこられたことがある。当時、建設計画をすでにかなり具体的に詰めていたので、望遠鏡本体の建設でのがつぶり四つの協力はお断りすることにした。だが、望遠鏡に搭載する観測装置の制作や天文学研究そのものでの日英協力については、具体的な可能性を探ろうということになった。

その後、日本は1991年より9年計画でハワイ島に口径8mの望遠鏡「すばる」の建設を開始し、英国は米国、カナダ、チリ、アルゼンチン、ブラジルの六カ国共同で合計二台の8m級望遠鏡をハワイ島とチリのアンデス高原に建設する計画「GEMINI」をとりまとめ、93年から建設に着手することとなった。これに先立ち、独、仏、伊、蘭、西、ベルギー、デンマーク、スウェーデンの欧州大陸8ヶ国の国際機構である欧州南天天文台も、90年よりチリ北部のアンデス高原に合計4台の8m望遠鏡を建設するVLT計画に着手していた。奇しくも、この3グループの8m級望遠鏡が完成するのは98年から99年となり、21世紀を前に天文学の世界は大きな転機を迎えようとしている。

天文学と観測装置制作での日英協力の話が具体化しだしたのは、それぞれの望遠鏡建設の枠組みが固まった94年ころからであった。95年春には英国から6名の天文学者が来日し、観測的宇宙論研究、理論研究、星形成研究の3つのテーマでの具体協力の検討を行った。その結果、同年秋から日本学術振興会と王立科学協会の共同プログラムの一環として日英科学協力事業共同研究「銀河の形成と進化」(英国側研究代表者:Richard Ellis教授、日本側:筆者)が始まった。

この日英協力の目玉は、東京大学の岡村定矩教授グループが国立天文台との共同で開発した大型モザイクCCDカメラを大西洋のカナリー諸島にある英国の4.2m望遠鏡(WHT: William Herschel Telescope)に搭載して、これまでにない広い視野を高感度カメラで観測しようというものである。40個もの高感度CCD素子を並べた日本のカメラは画素数が4000万個

に及ぶ世界最大のカメラである。観測テーマとして10件ほどの提案が日英双方から出されたが、最終的には「かみのけ座銀河団の撮像観測による銀河光度関数の決定」と「高赤方偏移クェーサーの探査」の2つの観測提案が採択され、1996年4月に合計11夜の観測時間が割り当てられた。

観測提案の採択決定を受けて、モザイクCCDカメラをWHTに取り付けられるように急遽改造し、装置責任者の国立天文台関口真木助手(現東京大学宇宙線研究所助教授)、柏川伸成助手、東京大学嶋作一大助手、東大大学院生の小宮山裕君と筆者が出かける手配を整えた。ところが、出発の直前に筆者の妻が緊急入院し、手術を必要とする事態が発生したため、筆者は出張を断念することにした。筆者が行かなかったのが幸いしたのか、96年春の日英共同観測は大成功であった。観測を始めてからいくつかの技術的問題があることが現地で判明したが、経験豊かな関口助手をはじめとするクルーの工夫で対処し、天候にも恵まれて、いくつかの天域の大量かつ良質なCCD画像データを持ち帰ることができた。

データの解析はその後、日英独立に進め、結果を互いに比較して検討を行った。かみのけ座銀河団については、これまでの乳剤写真乾板の観測では測定できなかった矮小銀河と呼ばれる微光の銀河が多数確認でき、銀河団の中での明るい銀河と暗い銀河の割合や楕円銀河と渦巻き銀河の割合などについて、新しい知見を得ることができた。銀河の誕生と生い立ちを考える上で、目立つ立派な銀河だけを見ていたのでは全貌がつかめない。かみのけ座の銀河団の中にある大小すべての銀河を調査しつくすことによって、初めて銀河の社会全体が見えてくるわけである。この観測結果は、日英共同の論文として国際研究集会などでも発表され注目を集めている。

もう一つのテーマは赤方偏移が5を越すクェーサーを見つけようというテーマであった。膨張宇宙では遠い天体ほど大きな速度で我々から遠ざかっている。その速度に応じて、光の波長がドップラー効果で波長の長い赤い方にずれる。そのずれの割合を赤方偏移と呼び、 z と書く。現在知られている赤方偏移最大の天体は、 $z=4.9$ であり、光速の約93%の速さで我々から遠ざかっている。宇宙年齢を133億年とする標準的な宇宙モデルでは、この天体は123億光年ほどの遠方であり、簡単にいうと123億年昔の姿を我々に見せていることになる。宇宙が始まってまだ10億年ほどの幼年期の天体である。これよりさらに赤方偏移の大きいクェーサーが見つければ、より昔の宇宙の姿を調べることができる。このため赤方偏移が5を越すクェーサーの探査計画がいろんな天文学者により練られてきたが、これまでだれも成功していない。これまでのクェーサーの探索観測は、広い天域をカバーするには感度の低い写真乾板を使うしかなく、高感度のCCDでは狭い

領域しか観測できなかった。今回は、高感度のCCDで広い天域を観測した96年のデータから、21等級までの暗い天体で期待される色を持つ候補天体を選びだし、一つ一つスペクトル観測を行ってその正体を確認しようという正統派の作戦であった。

航空券が高くなるゴールデンウィークの前に成田を立ち、パリ、マドリード経由で、カナリー諸島のラバルマ島に着いたのは4月26日であった。筆者自身は1987年から数えてラバルマ天文台の訪問はこれが5度目となる。今回は前回派遣した柏川助手と小宮山君と一緒に。翌日到着した共同観測の英国側メンバーはRichard McMahon 博士、Mike Irwin 博士と大学院生の Andrew Kulkut 君の三名である。スポーツマンの Mike は麓から標高2400mの山頂まで、8時間かけて山道を歩いて登ってきた。翌日から徹夜の観測だというのに、まったくタフな男である。

観測前に作戦会議を開いた結果、初日は日本側の選んだ候補天体から観測することにした。タイムゾーンのかなり西側にあり、しかも夏時間を採用しているラバルマ島では、この日の日没が21時、日の出が7時であり、観測開始時刻は22時ころとなる。快晴の夜空には満天の星。日没後にはヘルボップ彗星が10度以上もの長さの太くて湾曲した尾をたなびかせているのがはっきりと見えた。

結局、今回の観測では、2夜で合計約50個の候補天体のスペクトルを観測し、その正体を調べたが、そのうちの30個は太陽の10%程度の質量しかないM型星、18個は遠方の楕円銀河、4個はスペクトルが判別不能なものであった。赤方偏移が1.3程度のクェーサーと、特異なスペクトルを示すM型星がそれぞれ一つづつ見つかったが、ねらっていた赤方偏移5以上のクェーサーは、今回の観測では残念ながら見つからなかった。来年の観測に期待している。

これまでの共同研究の成果を受けて、97年5月には日本から天文学者8名が訪英し、光学観測から電波観測に至る地上天文学に関するより包括的な日英協力を推進することについて合意書を取り交わした。98年春の観測では日本のモザイクCCDカメラを日英の二班の天文学者に使ってもらうように準備を進めている。「すばる」望遠鏡の完成を間近に控えて、これからますます楽しみである。

(IYE Masanori, 国立天文台教授, Subaru Project Scientist, Institute of Astronomy, Cambridge 1982/83)

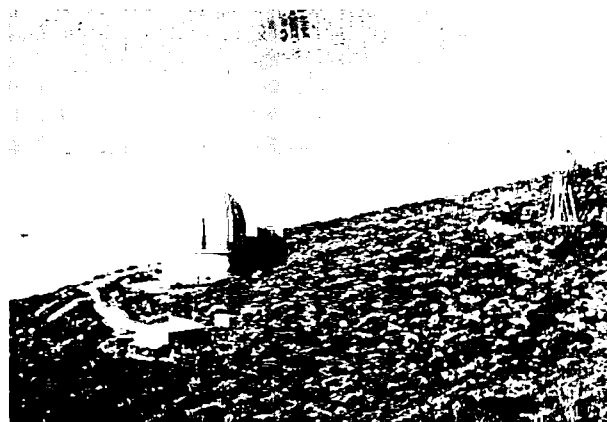


写真1: 大西洋のカナリー諸島のラバルマ天文台
4.2mウィリアム・ハーシェル望遠鏡のドーム



写真2: 日没とともにスリットを開けて観測の準備に入る
ウィリアム・ハーシェル望遠鏡



写真3: 4.2mウィリアムハーシェル望遠鏡観測制御室の
日英協同観測チーム(左から、小宮山、柏川、
Kulkut, McMahon, Irwin, 家)

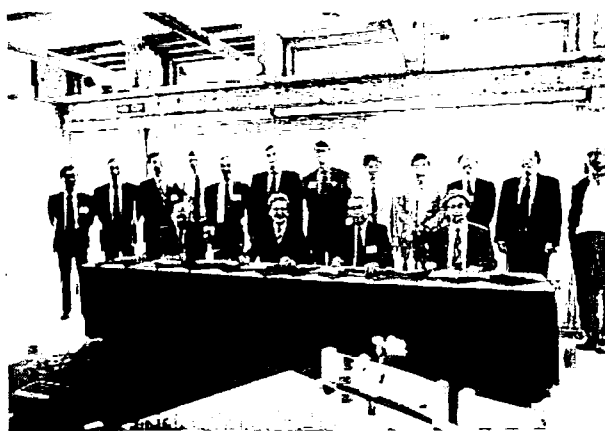


写真4: 地上天文学に関する日英協力合意書署名式、ケンブリッジにて (前列左から、Prof. Jim Hough, Prof. Alec Boksenberg、小平桂一国立天文台長、海部宣男教授)
(後列左から、筆者、Prof. Richard Ellis、唐生宏教授、Prof. Mike Bode、岡村定矩教授、Dr. Ian Corbett, Prof. Roger Davies、佐藤修二教授、池内了教授、石黒正人教授、Prof. Richard Hills、Prof. Andy Lawrence)

イギリス人と幽霊との深い関係について私は全く気づいていなかった。幽霊を目撃したことがあるという話をイギリス人から聞いたことも、イギリスに幽霊が出没する屋敷が数多くあることを教えてくれた人もいなかった。勿論、英国留学中に幽霊に出会ったこともなかった。

ところが留学から帰った翌年、『英国だより』(駐日英国大使館広報部発行、1970)で「城と宮殿と幽霊」というイギリス観光協会のMark Kemmisによる以下の紹介記事を読み、しまったという思いをもったことだった。それは、留学中に訪れたことのあるロンドン塔、ウエストミンスター寺院、ウインザー城、ロンドン大学、ストランド街、テムズ河畔、セント・ジェイムズ公園などなど、多くの建物や公園や街路や地下鉄駅などにまつわる幽霊物語や、イギリス人と幽霊との密接なかかわり方についての予備知識をもっていたなら、英国留學生活がもっと豊かで違ったものになっていただろうと考えたからだ。

イギリスには数多くの幽霊物語がある。一般の人に開放されている城や宮殿や大邸宅は約600あり、その大部分は幽霊が出没するという評判が立っている。このほかに教会、劇場、旅館には不思議な出来事の物語も伝わっている。幽霊の中には王、女王、王子、貴族、貴婦人、僧侶、軍人などがおり、熊の幽霊さえもいる。場合によると、何世紀にもわたる数多くの目撃記録があり、また、まじめな記事もあるので、こうした物語をうまく説明するのはむずかしい。

その後まもなくして文部省からの要請により再びロンドンを訪れる機会を得た折りに入手した"Chambers' Guide to London The Secret City" (Ocean Books, 1974)を読み、またシェークスピアの「マクベス」やディケンズの「クリスマス・キャロル」などの文学作品からも、やはりイギリス人は幽霊がお好きなのだということを知ったのだ。

「ロンドン是世界一の幽霊の街である」と著者M. Chambersが記しているように、イギリス国内で最も幽霊の出没するところはロンドンであることは間違いあるまい。ロンドンのある本屋さんなどは「ロンドンの通りで見かける人間の半数は幽霊だと考えている」と、ロンドン幽霊クラブ会長であり、また"Haunted London" (Fontana Books, 1975)の著者でもあるP. Underwoodに語っているほどだ。

それでは"Haunted London"から幽霊物語をいくつか紹介してみましょう。

1 コラシーム劇場(セント・マーチンズ・レイン)

この劇場に昔、第一次世界大戦当時の兵士の幽霊が出没していた。照明が落とされ、いよいよ開演という時になると、制服姿の幽霊が現れ、二階正面の特等席の通路を通り、二列目の座席に向かうのが常であった。

この幽霊は、休暇の最後の晩をコラシーム劇場で過ごそうとやってきた兵士であることがわかった。幽霊が初めてこの劇場に現れた1918年10月3日は、実は兵士が戦場で無念の死を遂げた日だった。

2 ロンドン塔の熊の幽霊

ロンドン塔内に大昔、野獣動物園があったが、その動物はやがて1834年になってリージェント・パークの動物園(ロンドン動物園)に移されることになった。ヘンリー一世はライオンやヒョウを飼っていたが、ヘンリー三世はそれに他の野性動物をさらに加えて飼っていた。エドワード三世は自分が集めた多くの動物を誇りにしていた。その後の王たちも熊いじめ(熊をつないでおいて犬をけしかけていじめる一種の遊び)など、野性動物同士の決闘を観戦しては楽しんでた。

ロンドン塔内で熊の亡霊がしばしば目撃されているが、それはまさに現在まで生きてきた残忍な時代の習慣を今にとどめている遺物なのであろう。ある記録によると、マーチン・タワー内の入り口近くで巨大な熊を目撃した見張り番がいたらしい。見張り番が勇気を振りしぼって銃剣を突き刺したのだったが、銃剣は熊の体をスッと貫通し、入り口の扉にぶちあたった。そして毛むじらな熊のお化けがこちらに近づいてきたので、見張り番は気を失ってしまった。

もう一人の見張り番が扉に突きあたる物音を聞きつけ、あわてて駆けつけてみると同僚が意識を失っていた。熊の姿はなかった。不運な見張り番は衛兵室に運び込まれ、ある程度は回復したものの、神経が完全に損なわれ、二日後に死んだ。彼は恐ろしい体験を繰り返して繰り返して語っていた。医者は彼が酒に酔っていただけの酔っ払いであることを立証した。不幸な事件が起きるほんの数分前、仲間の見張り番が彼の前を通り過ぎた際、二こと三こと言葉を交わしていたことからみても、眠っていたわけでもないことが明らかだ。また彼の突き刺した銃剣は、二日間も頑丈なオーク材の扉に残っていたという。

3 自殺の名所テムズ河北岸通り

「クレオパトラの針」やウオータルー橋あたりのテムズ河北岸通りは、自殺しようとする者にとって不思議な魅力をもつ場所だった。いや、現在でもそうだと云えるかもしれない。この御影石のオペリスクは、もともとは紀元1500年頃にエジプトで建立されたものだ。このテムズ河北岸通り周辺がテムズ河の河岸でも最も多く自殺や自殺未遂事件が起きる自殺の名所となっていることは、テムズ河警察署のベテラン職員にはすでに知られている事実である。

異様な影のような、あるいは背の高い人間らしきものが河岸に沿ってめぐらされた保護柵を乗り越え、素っ裸でテムズ河に飛び込み、やがて消えたという報告がいくつもある。ザブンと水のはねる音はまったくなく、聞こえてくる音といえば、ただ人のうめき苦しむ声やあざ笑う声だけ。その訳は今のところ不明である。

ウオータルー橋の橋台近くでバラバラの死体が詰められている大きなカバンが発見されてからというもの、ウオータルー橋で首なしの男性のお化けが現れるということがしばらくの間続いた。お化けは、遺体が発見された地点近くに、数夜にわたって連続して現れたと報告されている。遺体の身元は判明されなかった。幽霊の出現だけが数週間続いた。

エリオット・オドンネルは「幽霊クラブ」で、ある

警官が体験した次のような話を報告している。

ある晩、警官がウオータルー橋を歩いて渡っていた。誰かが後を追いかけてくる気配がした。振りかえると、立派な身なりの若い女性が顔前にニョッと現れた。女性はとても興奮しているようだった。女性は、何かとても困っているらしい人が今私が通ってきたあそこにいるので、一緒にきてくれないかと警官に哀願した。女性は警官を連れ、橋を渡り切って、北岸通りを戻っていった。(オドンネルの話はこの警官から直接聞いた直話である)

二人が「クレオパトラの針」の方向へ歩いていくと、若い女性が今まさにテムズ河に身を投げようとしていた。警官は大急ぎで走り寄り、どうにか悲劇を未然に防ぐことができた。彼は若い女性を歩道の安全地帯にやっとのことで連れ戻すことができた。顔を覗いてみると、目鼻立ちも身なりも、さっき自分をここへ連れてきた若い女性とまったくウリ二つではないか！警官は自分を連れてきたさっきの女性を振り向き、訳を聞こうとした。しかし、その姿はもはやどこにもなかった。

警官は投身自殺を計ろうとした女性にいろいろと尋問してみたが、この女性には双子の姉妹などはおらず、近親者も親しい友人もないということだった。さらに、その晩北岸通りで出会った女性など一人もないと答えた。

4 エリファント・アンド・カースル駅

地下鉄駅エリファント・アンド・カースル駅は、昔は人が走ったり、戸をノックしたり、コツコツと何かをたたく不思議な音がしたり、ドアがひとりでに開いたりするという奇怪なことが起きた駅だ。

駅近くのハーン・ヒルに住むミセス・ワトソンは、ある晩遅くこの駅で列車を降り家路を急いでいた。実際プラットホームにいる人間は自分だけ、駅の異常な静けさや不気味な雰囲気は襲われたのだった。ワトソン夫人がたまたま通りかかった赤帽にそのことを話すと、赤帽はこの駅構内には幽霊が一人だけでなく何人もいるんですよと言った！

ワトソン夫人は最初は冗談だろうと思っていたが、話を聞いていくうちに嘘をついているわけではないことがわかった。赤帽は夜勤の時はほとんど赤帽室で過ごしているが、小さな赤帽室のドアはいつもしっかりと締め切っているのに、どうしたわけか、ひとりでにサアッと大きく開くことが何度もあったと語った。周辺を見渡して見ても誰も見えなかったというのだ。

まるで赤帽を探してでもいるかのよう、誰かが赤帽室のドアをコンコンとノックする音を聞くこともしばしばあった。だがドアを開けてみると、駅のプラットホームには人は誰もいない。

また、夜勤専門の赤帽サージャント氏は、誰かがプラットホームをこちらに走ってくる音がしたので赤帽室の窓の外を見ると、果たして誰もいないということがときどきあったと、後で語っている。

サージャント氏は、人がプラットホームを走る足音を何度も何度も聞いたことがあるが、いつもそのたびに今度はきっと誰かが本当に走ってきたのだろうと、冬寒い晩などによく聞かれるような

足音をたてながら歩いている人間などまったくどこにもいないということが実際、一度となくあったのである。しかもその不可思議な足音を聞いたことがある人間は、サージャント氏だけではなく。他の人たちもやはり、プラットホームから切符売り場に通じる階段あたりで同様の足音を聞いたと言っている。

ある時、サージャント氏は階段の最上段に立ち、もう乗り降りする乗客が誰もいなくなっている階段をじっと見入っていた。すると、例の足音が聞こえてきたのではないかと、足音はどうやら階段を降りていったようだった。

ホートン氏は、ブラックフライアーズ《テムズ河にかかるブラックフライアーズ橋の北岸地区で、同名の地下鉄駅がある》に住む、夜間専任の赤帽だった。彼はエリファント・アンド・カースル駅の赤帽室で奇妙な足音やコツコツ、コンコンという物音を耳にしてから、この駅での夜勤を拒否することにしたのだった。彼はプラットホームを赤帽室の方に近づいてくる足音を耳にした。足音は赤帽室の外で止まり、トントン、トントンと二度、戸口をたたく音がした。ドアを開けてみたが、しかしプラットホームには人は誰もいなかった。

土曜日の夜は夜行便が運行されず、駅は完全に閉鎖される。ところが、そういう場合でも、プラットホームで足音が聞こえてくると駅員たちは語っている。

* * *

今回はこれでどんとはらい。いずれも筆者の翻訳ですが、Chambersの"Guide"は北星堂から出版されていますし、また100を超える幽霊屋敷を案内してくれるUnderwoodの"Haunted London"は出版にむけ著作権取得中です。ご期待ください。

(SATO Shigeo, 東北学院大学教養学部教授, University of Wales Institute of Science and Technology 1968/69)

「現代の英国・図書目録1960 - 1997」

(編集・発行ブリティッシュ・カウンシル)

ブリティッシュ・カウンシルでは、英国祭98を記念し、英国に関する日本語の図書の目録「現代の英国」を刊行致しました。これは、1960年から1997年夏までに日本国内で発行された図書の中から、文学作品の翻訳、伝記をのぞく書誌を網羅的にあつめ、テーマごとにまとめた目録です。図書館情報センター(東京)にて販売しております。

日英協会・BCJA会員特別価格3150円(定価6300円)

郵送購入ご希望の方は、現金書留か、郵便為替で代金を下記までお送り下さい。銀行振込みをご希望の方は、担当までお問合せ下さい。

162-0825東京都新宿区神楽坂1-2

ブリティッシュ・カウンシル図書館情報センター

「現代の英国」日英協会会員特別頒布係

問合せ先: 03-3235-8047 担当: 真栄城(まえしろ)

今回は、私の滞在中にお世話になったケンブリッジ大学国際法研究所(RCIL)の職員の方々を中心に記そう。なお、この春より、前所長のラウターバクト教授(Prof. E. Lauterpacht)の功績を讃えて、同研究所は、その名前に同教授の名を冠して Lauterpacht Research Centre for International Law (LRCIL)としたそうである。

まず、筆頭秘書(Administrative Secretary)のグレン(Mrs. Glen Howard)さんである。私の渡英する1年ほど前に前任者から引き継いだ彼女は、その手際の良さと効率のよい秘書作業が所長に大変信頼されており、一切の事務関係の仕事を一手に引き受けていた。彼女のパワーは、まさに男勝りで、仕事の速さは驚くばかりである。入所のための手紙のやりとりでは、全く支障なく、滞在先の手配、身辺に関するありとあらゆる情報を、遅滞なく伝えてくれた。他の日本人の訪問研究員の方々に聞いたら、このようなことは英国では珍しい、とのことである。

彼女のリスパンスの良さのおかげで、私は安心して、成田空港を出発できた。毎朝10時の研究所恒例のコーヒーブレイクでも、コーヒーやお菓子の世話もしていた。そうかと思えば、研究員たちの部屋割り、机の配置、一切の行事の手配・通知に始まり、研究所のよく異常をきたす電気配線工事の下作業、水道の調節、暖房器械の調節なども彼女が一生懸命に一人でやるのである。廻りの連中は平気でも、私は女性である彼女の重労働ともいうべき仕事に気が気でないので、頻繁に手伝った。例えば、椅子や机の移動、電気関係などの仕事は、進んで私が手を貸した。研究所から去っていく訪問研究員たちのフェアウェル・パーティでは、手先が彼女よりも器用だと思ったのか、彼女は、私に必ずプレゼントの包装を頼んだ。彼女は私の協力をいたく喜び、私を同研究所での'Official Lapper'と認めてくれた。

彼女は、ケンブリッジから車で30分ほど離れたシェップレス(Shepreth)という郊外にご主人と一緒に住んでいる。彼女は、余り休暇も取らず、仕事熱心なので、所長が「少しは休暇をとったらどうか」と奨めたほどである。ご自宅は、およそ600年ほど昔の古い家(cottageと呼ぶにふさわしい)を何度も増・改築してあり、ご主人ともかなり手を入れていた。細長い形の庭は、敷地の8割り以上を占め、イギリス人の庭らしく、きれいに花を植え、野菜を栽培し、芝の手入れがしてあった。しかも、お宅は誰もがZooと呼んで憚らないほど動物で充満しており、毎朝4時半に起きて犬、猫、山羊、豚、鶏、などの世話をするのだそうだ。山羊のミルクとチーズ、鶏卵だけでなく、自分で育てた豚や鶏も食べることがあったので、自給自足もほぼ可能であろうと思われた。実際、卵や自家製のジャムは近所の家々に配っていたし、goat cheeseもコーヒーブレイクに持ってきたことがある。さすがに、その臭いには参った。彼女の家に食事に招かれた際には、自家製の豚肉ハムや鶏肉をご馳走になった。もっとも自分の家で育てた豚や鶏を食べるのも随分と勇気がいることではないだろうか。

こんな事情なので、彼女は、家を空けてご主人と旅行をすることも滅多にないらしい。その彼女にも孫が生まれ、息子夫婦が訪れることをことのほか楽しみにしていた。そして、一人娘の彼女は、英国海軍を定年退官して一人暮らしをしていたご自分のお父さんを、その晩年に彼女の自宅に増設したアネックスに住ませ、一緒に暮らせたことを非常に喜んでいて。次に、秘書のクリスティーヌ(Ms. Christine Kay)を紹介しよう。同研究所の設立当初からのメンバーである彼女は、主任研究員の秘書及びブルー・リーダーをしていたが、大の猫好きで、鳥や花などの自然をこよなく愛する女性である。独りぼっちが好きで、大人しい人であったが、ユーモアのセンスのあるお茶目な人でもあった。スイス人の恋人と一緒にジュネーブを始めとしたスイスの自然を愛していた。

彼女は、私に紅茶の入れ方を伝授してくれ、毎朝、私が入れる紅茶を嬉しそうに飲んだ。彼女によれば、ティー・ポットを予めよく暖め、ティー・バッグは二つ入れ、ミルクは先に(!)カップに入れておくものなのだそうだ。彼女曰く、「サー・トーマス・リプトン(Sir Thomas Lipton)が言うには、紅茶に後から牛乳を注ぐことほど悪いことはない。」と。静寂を好む彼女は、誰も出勤しない日曜日に来て仕事をする代わりに月曜日を休みにしていた。そのため、日曜に教会に行く前に私とよく話をする機会があった。

彼女はケンブリッジ郊外のバー・ヒル(Bar Hill)から、車で研究所に一番のりしていた。ある日、自分の愛する猫が自宅近くの幹線道路で車にひかれて死んだことを非常に悲しみ、車社会のマイナス面を憂えて引っ越しをすると心に決めた。しかし、適切な物件が見つからず、引っ越し代わりに足の不自由な猫を新たに引き取って、飼うことにしたという。

残念なのは、研究所が引き受けていたプロジェクトが資金の都合上終了したため、彼女も研究所を辞めざるを得なくなったことである。入れ替わりの激しい研究所で最古参の彼女は、友人として非常に気のあった私が帰国することを心から寂しがってくれた。

最後は、何回か以前の稿(BCJAニューズレター第7号(1997年)参照)でも触れているストロング(Mrs. Irene Stronge)さんである。毎朝、七時すぎには研究所の清掃から片づけなどの仕事を始め、いわゆる裏方の仕事を設立当初より一手に引き受けていた。研究所の隣に住んでいたため、研究所とも何かと関わりが深く、所長とも長いつきあいであった。

毎朝、お喋り付きの彼女と会話をする中で、英語のウォーム・アップをする私は、そのお喋りに喜んでつきあい、研究所の歴史や色々な世間話を知ることができ、英国の実生活を教えてもらうことができた。特に、イースト・アングリア(East Anglia)地方特有の訛りと早口な英語には、当初なかなかついていけなかったが、彼女の話す昔話や近所の噂などとても身近な話題には興味をそそられることが多かった。「同研究所の歴史とインサイド・ストーリーを記した本が書けるね。」と言って、お互いに笑ったこともしばしばである。

彼女は、60歳の還暦を迎えるというのに非常に活発で、仕事熱心では有名であった。毎週金曜日に行われるフライデー・ランチ・セミナーには彼女がランチの

サンドイッチやお菓子を作り、料理上手な腕前をみんなに披露してくれた。同研究所設立時に、エディンバラ公をお迎えして落成式をしたそうであるが、その時直々に同公より握手してもらった姿を映した写真を見せてもらったことがある。その彼女を支えるご主人は、昔、英国空軍に所属していたことを誇りにしており、アイリッシュ気質のジョーク好きで、アイルランド人の方がいかにイングランド人よりも優しく心温かいか教えてくれた。酒が好きなのに、心臓が悪いため、ドクター・ストップがかかっていた。それにもかかわらず、あるパーティで、ジャパニーズ・ウォーターと称して大好きな日本酒を飲み過ぎた時には、24時間眠り続け、我々を慌てさせた。

お二人の仲の良さは抜群で、5人の子供と20人近い孫や曾孫に囲まれてとても嬉しそうであった。そして、ほぼ毎週土曜日の晩には、郊外のダンス・ホールに夫婦そろって出かけ、エンジョイする様子は、英国でも最近離婚の多い若者世代との隔絶を痛感させた。彼に言わせれば、夫婦円満・長続きの秘訣は、「彼女の願いは、自分の服すべき命令である。」(Her wish is my order.)の精神で生きることだそうだ。彼女との恒例のMorning Conversationでは、これらの家系の話が注釈なしで頻繁に出てくるため、かなり込み入った家系図を書いて、それを参照しながら彼女と話さないと頭が混乱するほどであった。ストロング夫妻は、地に足の着いた地道な生活を送っており、結婚当初の苦勞が身に付いているせいか、ありとあらゆる生活の知恵を豊富に持っていた。料理や裁縫を始めとした家事の一切から日曜大工的な作業など、古き良き英国人の日常生活を体現するかのごとく暮らしている。

以上のように、私は研究所の中に自分の「住居」と「研究場所」をもらって、異例とも言うべきいわば「職住同居」状態の中で、英国生活を楽しむことができた。確か1897年に建築された同研究所の建物は、ケンブリッジの「山の手地区」とも言えるニューナム(Newnham)・エリアに属し、元々は貴族だか偉い人の邸宅であったらしい。手入れが行き届いた広大な庭の整然とした美しさ、芝の緑と花々のカラフルさは、研究で疲れた私の目と心をいつも癒やしてくれた。小鳥のさえずり、リスたちの戯れ、そして時折現れる野ウサギとハリネズミ(hedgehog)の、庭を闊歩する様子は、自然美をそのまま保つ同地区の特色をよく表している。特にケンブリッジでの歴史と自然との調和は、ここで記した人々の心にそのまま反映されているというのが実感である。その意味で、ケム川は、これらの人々の心にも絶え間なく流れているように思う。

(IKESHIMA Taisaku, Cambridge 1994/95, 慶応義塾大学)

1996年度会計報告について

BCJAの会計に関しましては毎年11月の総会で報告し承認を得るということに成っておりますが、昨年の総会ではTreasurerの木村先生が長期海外出張中で、Newsletter上で報告するという事で承認をいただきました。そこで下記のように報告申し上げます。

1995年度よりの持ち越金	339,672円
収入	入会金 130,000円
	利息 297円
	配当金 6,150円

	計 476,119円
支出	封筒代 8,755円

	計 8,755円

差し引き467,364円を1997年度への持ち越金としました。この会計報告に関しまして、質疑のある方は事務局までお問い合わせ下さい。

英国祭UK98記念出版「英国の文化にわたる(仮題)」発行のお知らせ

BCJA編「英国の文化にわたる(仮題)」(風人社刊)は、予定どおり本年4月半ばの発行をめざして仕上げ段階にはいりました。昨年末、英国をよく知りたい人および英国留学をめざす若い人たちを対象にご執筆いただける会員の方を募りましたが、最終的に幅広い分野にわたる60名近くの会員の皆様のご執筆をいただきました。短い準備期間にもかかわらずご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。また、本書出版のためのご寄付も、多くの方々から150万円近いご篤志をいただきました。皆様のご支援に深く感謝申し上げます。

出版には、British Councilならびに英国大使館のご後援をいただき、英国祭UK98の公式イベントとして認められました。本書には、英国の学問、研究はもとより、文化、生活等にいたるまで、英国に留学した会員でなければ書けない珠玉の内容が満載されています。わが国におけるBritish Councilの活動とBCJAの歴史についても触れられています。BCJAならではのユニークな本になりました。本書は一般の読者を対象にしておりますが、本会会員の皆様にも興味深く読んでいただけるものと確信しております。

本書出版のひとつの大きな目標は、BCJA会員の執筆をとおして、広くわが国にBritish Councilの活動を知らせることにあります。つきましては「ひとり2冊運動」を提案いたします。1冊は自分のため、もう一冊は英国をもっと知りたい人のために、この本をお買いあげいただけると嬉しく存じます。それが、British Councilに育てていただいた恩返しになればと願っております。ご賛同いただける方は、BCJA事務局吉田和子様あてにご連絡いただけると幸いです。末筆ながら、皆様のご協力に心よりの感謝を捧げます。

記念出版編集委員長 瀬川彰久

【編集後記】

不況のあおりで韓国で予定されていた国際学会が開催不能になるなど、最近はあまりよいニュースがありません。しかしBCJAに関しましてはUK98記念出版の原稿の方が順調に集り、出版されるのも間近で、記念すべきことだと思います。この影響が今回はNewsletterへの投稿がやや少なかったような気がしますが、大変な力作を掲載することができうれしく思っております。仕事の片手間に編集を続けており、最近はとくに多忙なため、読みづらい点があるかもしれません。お許しただければ幸いです。次号は第10号となりますので、多数の投稿を期待しております。御意見などありましたらお気軽にお申しつけください。

(平 孝臣、東京女子医科大学 脳神経外科, ttaira@nij.twmc.ac.jp)